

島根大学言語教育研究会 第11回研究発表会 報告

日時 平成23年7月8日（金）18時～19時30分

会場 島根大学教育学部 212 研修室

発表題目 ハーンの日本文化論

発表者 高瀬 彰典

司 会 福田 景道



〔発表の概要〕

14 年間にも及ぶ日本体験から、ハーンは日本研究を着実に積み上げた。神道の靈魂偏在や仏教の輪廻転生が矛盾なく同居する、日本独自の神仏混淆の世界の諸相をつぶさに観察し、庶民の素朴な信仰と質素な生活に接することによって、彼自身の人間観や世界観は大きく変化したのである。さらに、スペンサーの社会進化論を援用しながら、ハーンは仏教的な円融や神道的な汎神論を科学的に捉えて理解するようになった。彼の日本に対する精神的探究は、作家・教育者としての求道者的な活動の独壇場であった。日本はハーンにとって最適の研究課題を提供し、彼は日本を世界に紹介した功労者として歴史に名を残した。この意味において、日本は彼にとって運命的な出会いであり、彼の才能を開花させる千載一遇の場となった。一心不乱に生涯を賭けて献身した彼の日本研究の著作は、今尚、類書を遙かに凌駕した価値を持ち続けている。ハーン的神道理解はけっして書物からのものではなく、次のような詩人的感性から体全体で把握した想念であった。神々の国の首都である松江での神道体験は、ハーンの日本理解の基盤となった。大気に神々しさを感じ取るハーンの鋭い詩的感性は、文献に頼ることもなく民衆の神道信仰に苦も無く入り込むことができた。「杵築」での次のような描写は、ハーンの研究の原点を示唆している。

「この大気そのものの中に何かが在る--うっすらと霞む山並みや妖しく青い湖面に降りそそぐ明るく澄んだ光の中に、何か神々しいものが感じられる--これが神道感覚というものだろうか。」(『神々の国の首都』講談社文庫、1990 年、p.140.)

来日後すぐに、神道の発祥地出雲に英語教師として赴任したことは、ハーンの研究を深める大きな動因となった。1890 年 9 月 14 日に外国人としては最初に出雲大社の社殿に正式参拝して感銘を受けた人物であった。宮司の儀式や巫女の舞から受けた感動から、彼は神道の本質に触れたような気がした。彼の神道研究は単なる文献的な解明ではなく、日本人の日常的な宗教生活の営みの中に神道の実相を探究するものであった。したがって、単に古事記や日本書紀などの書物に神道の起源を求めるのではなく、庶民の道德感情や生活様式そのものの中に生きている神道という視点を忘れなかった。さらに、「杵築」の中で、ハーンは庶民に浸透した神道の力強さを次のように述べている。

「仏教には万卷に及ぶ教理と、深遠な哲学と、海のように広大な文学がある。神道には哲学はない。体系的な倫理も、抽象的な教理もない。しかし、そのまさしく「ない」ことによって、西洋の宗教思想の侵略に対抗できた。東洋のいかなる信仰もなし得なかったことである。……現実の神道は書物の中に生きているのではない。儀式や戒律の中でもない。あくまで国民の心の裡に息づいているのである。そして、その国民の信仰心の最も純粋な発露、決して滅びず、けっして古びることのない表象が、神道なのである。」

(『神々の国の首都』講談社文庫、1990 年、pp.173-4.)

日本人の魂の中に存在する神道の生きた力の解明が、ハーンの研究の集大成『日本』に集約されたのである。西洋かぶれの知識人たちが恥ずべき不合理な信仰と卑下した神道の本質は、庶民の思考様式や日常生活の美しい道德感情に息づいていた。お天道様である朝日に向かって、すなわち天照大神に頭



を垂れて柏手を打ち虚心に帰って拝む素朴な庶民のおおらかな信仰の姿にハーンは感銘を受けていた。松江時代の『日本瞥見記』には、「神々の国の首都」、「杵築」、「日本人の微笑」、「日本の庭で」、「家庭の祭祀」などの秀逸な作品が収められている。また熊本時代の『東の国から』には、「石仏」、「柔術」、「勇士」などの佳作を書き、さらに、日本研究を伝統文化や神仏混淆の世界に広げた神戸時代では、『心』を完成させ、「日本文化の真髄」、「ハル」、「門つけ」、「趨勢一瞥」、「前世の観念」、「先祖崇拝の思想」などの

優れた日本論を書き残している。さらに、随筆や紀行文にも地方の神道思想や風習に関する独自の観察録を記している。

ハーン来日の年の 10 月 30 日には教育勅語が出され、神道による聖典として国民教育が規定された。中でも神道は過去に対する感謝や崇拝を教えた。明治維新の国難を乗り越えたものは、日本民族固有の神道の精神的支援であり、その道徳感情であり、国家に対する絶対服従の宗教に他ならなかった。教育勅語は政府批判を封じて、民衆を平定する政治的思惑でなされたもので、神道の天皇崇拝を利用して国家への忠誠を国民に強制するものであった。神道の先祖崇拝が天皇崇拝へ結びつき、教育勅語により国民への統制に利用されるのは、いかにも日本的な非論理性である。しかし、これが成功したのは長い間育成されてきた国民の情緒的な道徳感情によるものであった。この神道的教育の具現である教育勅語によって、日本は国粋主義を高めて日清・日露の大戦に勝利したのであった。ハーンは国家神道が軍国主義に果たす危険な役割を繰り返し警告している。国家神道は様々な多神教であった古神道を天皇崇拝を頂点とするものに再構成した明治政府の政治的産物であった。しかし、本来の神道信仰には西洋を凌駕する高い道徳感情があった。「先祖崇拝の思想」でハーンは次のように断言している。

「神道のもっている道徳的情操のうち、最も高いものは、過去に対する忠実な感謝の念である。この情操に相当するものは、西洋の感情生活のなかにはない。」(『心』岩波文庫、1951 年、p.267.)

反面、神道の先祖崇拝を中心とした集団主義や封建制による日本人の没個性は、独創性や個性に欠けた単調な画一性を生み出したので、科学的論理や市場原理に支配された西洋社会の個人主義的価値観に比べると、民族的劣性を示すものとされてきた。しかし、ハーンは日本人の没個性に独自の創造性や柔軟な生活の知恵を見出していた。日本人の没個性や画一性や模倣性の背後には、独自の柔軟な思考力や創造力があり、それは応用力や適応力と呼ぶことのできるものである。したがって、当初、ハーンは没個性や画一性に対して批判的であったが、日本研究を進めるにつれて肯定的な立場を取るようになった。彼の日本批判と賛美の愛憎相反は、表裏一体となって日本の将来に対する期待と懸念とが交錯した矛盾的考察となっている。ハーンは日本を心から愛し、将来の可能性を最大限に信じながら、数多くの希望と失意の果てに辿りついた集大成としての日本論『日本』を完成したのである。ハーンは最後の著書で日本の神道を歴史的眺望において捉え、日本民族の精神や国民性を解明しようとしたのである。

神道の先祖崇拝や仏教の前世の思想は、日本人の没個性を遺伝として伝えられた本能的感覚にした。このような先祖から伝わる本能的感情は、日本の神仏が説く深い道徳感情と結びつき、超個人的なものとなって、集合的意識を呼ぶべきものを生んでいる。

また、日本の美しい自然や伝統文化や神仏混淆の世界を西洋に紹介しながら、同時に彼は日本の古典や民話に取材した再話文学を多数執筆した。日本文化を熱心に西洋に紹介した彼の功績に対して、1915 年（大正 4 年）に日本政府は従四位を贈位した。日本の豊かな自然と伝統文化を心から愛し、彼はその様々な庶民の日常生活の様相を取材し、西洋化によって消えようとしながらも、尚も根強く残っている優れた旧日本の美質を豊かな想像力で描き、その優れた業績で東西比較文化研究の先駆的人物として高く評価されている。東京帝国大学講師の職は 1903 年（明治 36 年）まで続き、その後早稲田大学で教鞭を執ったが、1904 年（明治 37 年）9 月 26 日にハーンは不運にも心臓発作により 54 歳で急逝した。

